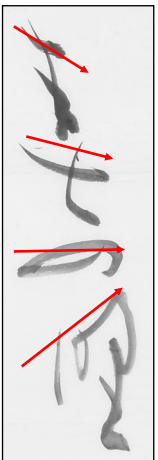
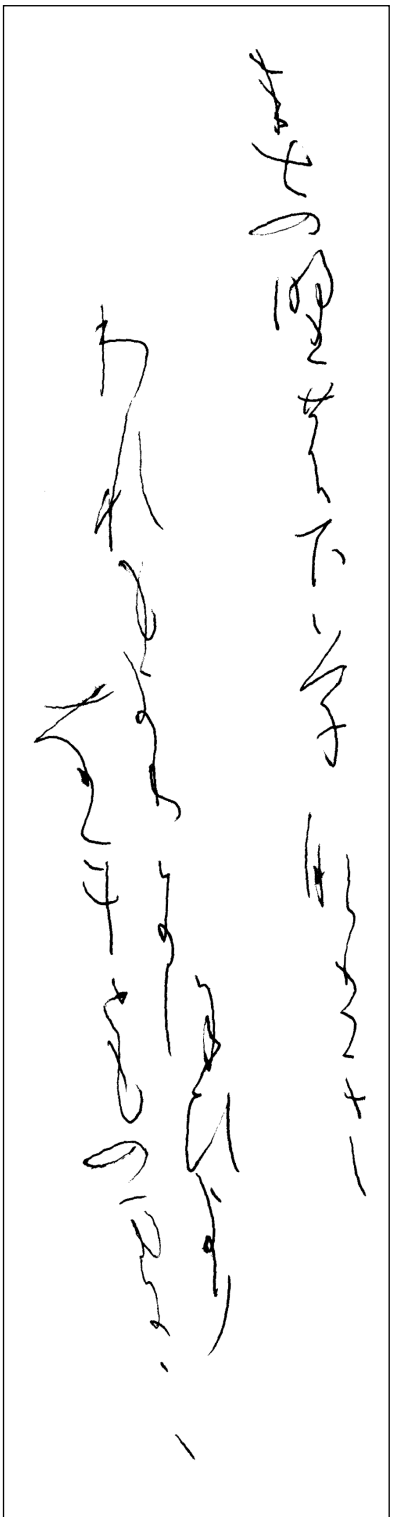
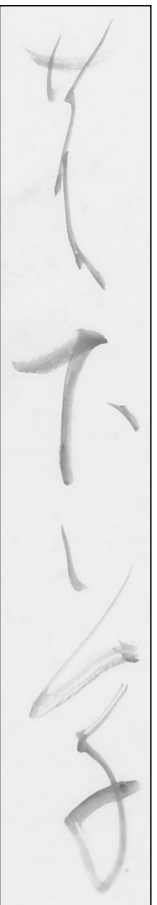


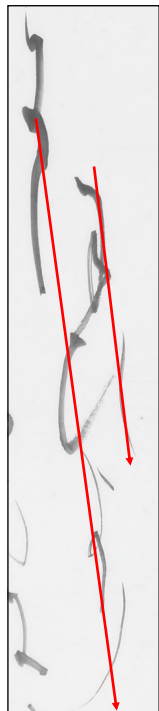
春の野の下草したぐさなびき我われも寄りにはひ寄りなむ友のまにまに



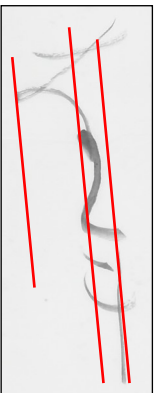
しっとりとして優雅な落ち着きのある線質で書き始めている。横画の多い「春」の字だが、その角度に微妙な変化をつけていて、その変化が「の」や「野」に繋がっているのが行の流れをスムーズにしている原因ともとれる。



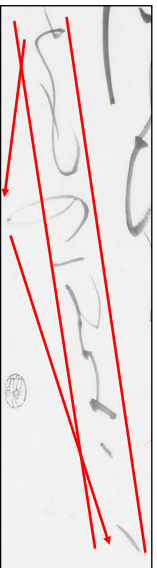
直線的な筆の運びで、掠れを有効に使ったキレのある線質で表現している。書き出しから次第にリズムに乗ってサラサラと書き進んでいる様子が見て取れる。



この作品唯一の墨継ぎの部分だ。墨が急に濃くなる墨継ぎの部分は作品の中でも特に目を惹きつける部分になる。「尔」から右下への流れとは別に「保」の傍の部分から右下への流れが添えられているように見える。



三行目の頭の部分だが、二行目と三行目の行間を狭くしている。一画目を長めにして二画目を左に張り出させているので三行目としての存在感はしっかりとしているが、ただ、最後に右に流れていてそのまま「牟」に連続で繋がって行間が狭くなるように書いているのは技術的にも見事な演出だと感じる。



最後の部分で、ゆったりとした自然な筆使いで収めようとしている。「の」の字を左に広く行からはみ出すように書いているのは、この三行目が少し長めなのでだからだと終わってしまわないよう、一つのリズムの変化を作ったのだらうと思う。最後の二つの点は、一つ目より二つ目の方が大きく長くなっている。余韻を感じさせる表現だ。

春の野農下草那悲き

われもよ利尔保ひより
奈牟ともの方尔々々

今月の課題は三行書きの散らし書き作品だ。一行目を高く、次第に行頭を低くして、作品的には少しずつ尻すぼみになってしまいう可能性のある構成だが、二、三行目を一つのまとめることにより、重さのある一行目とバランスをとっている。これといって大胆な字形の変化や大げさな表現はないが、それがかえって作品の奥深さを感じさせることになっているように感じる。一行目の筆の運びの変化と、二、三行目のていねいな筆使いをしっかりと表現してみてほしい。